

6. Japan's Way 「攻守にアクションするサッカー」 ～ 育成年代で取り組むべきこと

2007年、2008年に開催された4つの世界大会におけるプレーイメージは「攻守において切り替えの早い、コンパクトなサッカー」を目指すものであり、世界の女子サッカーの傾向はさらに男子のトレンドに近づいています。全ての大会に出場した日本女子代表は、その中でセンセーショナルな戦いを見せることができ、日本独自のスタイルを印象付けました。

しかし、この結果に甘んじてはいけません。世界から称賛された日本のプレーモデルは、世界中のプレーヤーが取り入れていくに違いありません。そして世界は、全員が攻守にかかわる「組織

的協働」を積極的に取り入れることにより、攻守の切り替えの早い、状況に応じたプレーを選択し、「よりテクニカルに。よりスピーディーに。よりタフに。」という流れになっていきます。そして、自国のプレーモデルをチェンジしたチームが世界の主流になっていくのではないのでしょうか。

「なでしこビジョン」の達成にはさらなるレベルアップが必要です。日本のプレーヤーは世界と比べるとどのカテゴリーにおいても体格・体力の差が大きく、スピード・パワー・リーチの差にどのように対抗していくかが最大のテーマだと言えます。また、世界のサッカーの進化に伴い、個のプレーの質とチームの協働のさらなるレベルアップとともに、日本独自のスタイル＝Japan's Wayを構築していくことが求められます。

なでしこジャパンは10年以上も「ハイプレッシャー下でのサッカー」を課題として取り組んできましたが、2007年女子ワールドカップ以降、攻撃を改善するには守備を改善するという考えに立ち、攻守においても主導権を取ることを意識するようになりま



した。さらに北京オリンピックに向けて、それを実践するプレーの質・フィジカル能力の向上に努めたことにより、攻守の連動・一体化が生まれ、世界のトップクラスと互角に戦える時間を増やすことができました。

Japan's Way は、日本の特長を生かす「攻守にアクションするサッカー」と表現できます。しかし、このスタイルを確立するためには、育成年代から取り組まなくてはならない課題があります。また、U-20・U-17 女子ワールドカップでファイナリストを達成できれば、なでしこジャパンが数年後にメダル獲得も現実的になるでしょう。そのためには育成年代、特に10歳から15歳までの取り組みが重要です。

Japan's Way 「攻守にアクションするサッカー」の確立を目指して、育成年代で取り組むべき課題、キーワードを4つ取り上げました。これらは当たり前のことのように感じられますが、この基本の徹底こそが、プレーヤーが世界で戦っていく上でのベースとなっていくものなのです。

1) 状況を観ながら考え、動きながらプレーする。

これは、「攻守にアクションするサッカー」(＝常に主導権を持つサッカー)を構築する上での重要なキーワードとなります。

世界のプレーヤーは、日本に比べ、身長が高く、スピード・パワーがあり、いわゆる身体能力が高いのです。このようなプレーヤーと同時に動き出していたのでは、主導権を持つことは到底勝ち目がありません。しかし「よーいドン！」ではなく、状況を観なが

ら考えて先に動き出すことができれば、可能となってきます。瞬発力、持久力、勤勉性、柔軟性、規律性といった日本人の特長を生かし、「状況を観ながら考え、動きながらプレーする」ことを育成年代で獲得することができれば、「攻守にアクションするサッカー」の実現に近づけることができます。

2) ゴール前の攻防

サッカーの本質は、「ゴールを失わずにボールを奪う。ボールを失わずにゴールを奪う。」ということです。ゴールを失わないためには、相手プレイヤーの選択肢を限定したプレーを身につけていくこと。ゴールを奪うために、選択肢を持ったプレーを身につけていくこと。さらに、プレーの原則をベースにしたサッカー観を身につけていくことが、日常のトレーニングの中で重要となってきました。

ます。

育成年代では、「サッカーのゲームは、どんなゲーム？」を理解させていくために、プレイヤーの年齢やレベルにあったピッチサイズと人数を考え、プレーする機会を多くし、ゴール前の攻防が頻繁に出現するオーガナイズでプレーさせることが大切です。

3) 守備の基本

「サッカーというのは、50%攻撃して、50%は守備をしなければならぬ。」とJFAテクニカル・アドバイザーのクロード・デュソー氏は言っています。

なでしこジャパンはワールドカップからオリンピックまでの1年で、「ボールを奪う」こと、特にアプローチのタイミングを早くしてグループでボールを奪うことにおいて改善がなされましたが、肝心なところで守備における対応のまずさから失点を招く場面がありま

した。

守備における基本テクニックを身につけていくことを育成年代から求めていかなければ、サッカーにはならないのです。育成年代では、どんどんボールを奪いに行かせましょう。その中で奪うチャンスを意図的に作り出し、相手プレイヤーとの駆け引きが身につけられるようになります。

4) コミュニケーション

サッカーはひとりでプレーするものではありません。「サッカーをどう戦うのか」ということについて、プレイヤー同士がお互いに要求しあい、理解しあうようになることが大切です。コミュニケーションの技術だけでなく、サッカーを分析する目も身につけてはなりません。すなわち、子どもたちにイニシアチブを持たせ、その上で賢くサッカーをすることを要求していくのです。

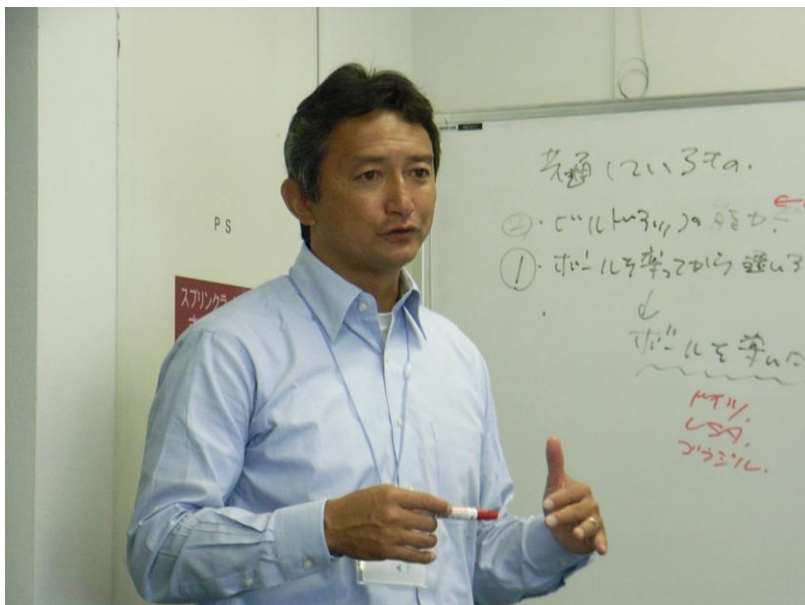
そのためには、もちろん指導者のサッカーの理解が重要です。ゲームの中でしっかりとコーチング(指導)する必要があり、それ

によりプレイヤーに判断基準を身につけさせなければなりません。日常生活でしつけが必要なようにサッカーのプレーにも必要であり、きちんとしたしつけができていなければ、プレイヤー自身が何を基準に判断すればよいか分からないからです。

判断基準が身につけば、プレイヤーは自ずと考え判断しプレーしていきます。その中でお互いが自分の意思を伝え、チームが協働するようになるのではないのでしょうか。

世界のトップを目指し、次の世界大会で再び世界を驚かせるようなサッカーを目指していかなければ、日本は世界のサッカーから後れを取ってしまいます。なぜならば、世界のプレイヤーは身体能力に優れ、常に世界の情報を収集し、代表強化とユース育成に力を注ぎこんでいるからです。

Japan's Way「攻守にアクションするサッカー」を、世界をターゲットに作り上げていくためには、ある意味、今までの常識、すなわち「当たり前」を変えていかなければならないと思います。言い換えれば、発想の転換が必要なのです。指導者は、常に柔軟で先見の目を持ち、なぜという疑問を持ち、学び続けていく姿勢を持ち続けましょう。



なでしこジャパンのプレースタイルの変遷と育成の重要性

JFA 女子委員長・アテネオリンピックなでしこジャパン監督 上田栄治

アテネオリンピックを目指して、自分自身はなでしこジャパンに「組織的なディフェンスからボールを奪って速攻」というプレースタイルを浸透させようとした。組織的な守備から速く、サイドを広く使うことを狙った。オリンピック予選のDPR.K戦やオリンピックのスウェーデン戦では成功したと言えるだろう。しかし、アテネオリンピック準々決勝アメリカ戦では、「奪ったボールをつなげない」という課題が残った。

この課題を受けて、次に就任した大橋監督が個人のレベルアップに力を入れ、「ハイプレッシャーの中でもボールポゼッションできる」ようなチームにしようとしたのは当然の流れと言える。ポストアテネから若い選手たちの台頭や、パス&コントロールのスキルアップ、体格・体力の差を埋める技術(スライディング・ヘディング・コンタクトスキル)の向上も高く評価されるべきである。しかし2007年のワールドカップにおいては、ロープレッシャーでは効果的な攻撃ができたものの、ハイプレッシャーではミスが多くなったのも事実である。

2008年から佐々木監督が就任、発想を転換し、「相手にハイプレッシャーをかけボールを奪う、奪ったボールを意図的にチャンスにつなげる」、いわゆる『攻守にアクションするサッカー』を目指した。攻撃と守備、どちらかにウェイトが傾くスタイルではなく、攻撃でも守備でも個人としてチームとして狙いのあるサッカーを指向するようになった。

サッカーは攻撃だけでも守備だけでもなく、切り替えの場面も重要であり、攻守一体のイメージが選手たちに伝えられないかと私自身考えていた。日本が世界と戦うために目指すサッカーは、日本人のストロングポイントを生かす『攻守にアクションするサッカー』というのがピッタリくる。日本は体格・体力に劣る分、賢くテクニックを発揮しなくてはならない。常に状況を観ながら、考えながら、動きながら、数的優位を作りながらプレーする必要がある。さらに1人でゴールを奪ったり、防いだりできるプレー・タレントも必要である。

このサッカーは育成年代から取り組んでいかないと実現できない。女子は中学生年代に非常に伸びる。なでしこジャパンが『攻守にアクションするサッカー』を確立するための下地がこの年代で醸成される。観ながら・考えながら・動きながらのテクニック、そしてそれを支えるフィジカルフィットネス、サッカーの本質の理解などである。

『世界のなでしこになる。』というビジョンを達成するためには、今まさに育成年代から取り組んでいく必要がある。

